

しあわせ

1 月 号



いけば念佛の功つもり、しなば浄土へまいりなん。とてもかくても、此身には思ひわづらふ事ぞなきと思ぬれば、死生ともにわづらひなし。(法然聖人)

(生きていくかぎり念仏の功はつもりつづけ、死するならば浄土に生まれさせていただく。いずれも尊いご縁といただくならば、生きるも死ぬも、いとつべきものは何もない。)

「手を合わす母」

新年あけましておめでとうございます。
門松や 冥土の旅の 一里塚
めでたくもありめでたくもなし
新年を迎えると必ず思い出す一休さんの歌。
七十歳を超えたとお正月を迎えても感動を失い、
儀礼的にお祝いするだけとなる。いや、だからこそ儀礼が大切なのだろう。

人間から儀礼を取ったら、人という名の最も凶暴な動物でしかなくなるだろう。
親しき中にも礼儀あり。礼節を失ったところに人間らしさと言えるものは、何が残るのだろう。
なまじっか知恵があるだけに厄介で油断のできない競争社会、悪賢い智慧と腕力がまかり通る熾烈な社会になるに違いない。
弱肉強食のせちがらい人間社会だからこそ、礼節を大切にすためたき人生、共に手を取り合って幸せな社会を作り上げてゆかねばならない。
めでたいと言える社会を。

法座案内

△年末・年始の法要▽

除夜会 大晦日 午後十一時半～

元旦会 元旦 午前七時半～

△ご正忌報恩講法要▽

一月 十三日(日) 昼席・夜席

十四日(月) 朝席

法話 自坊住職

△オンライン・コンサート▽

作曲家・平田聖子先生

音楽で現代に「親鸞」が甦る

一月十四日 午後一時半～(入場無料)

※本堂内は常時換気しておりますが、参拝の際は、検温・マスク着用をお願い致します。

府中町山田二丁目一五十三
 栢原山 龍仙寺
 電話(〇八二二)二八二四八二



古来、仏法は生死をこえる道といわれます。ただし、秦の始皇帝もびっくりの不老不死にせまる現代のアンチエイジング（抗加齢）医学とは違い、仏さまは不老不死の仙人ではありません。では「生死をこえる」とは、どういうことでしょうか。今回は法然聖人の「つねの仰せ」と伝わる法語を味わいましょう。

いけば念仏の功つもり、しなば浄土へま
いりなん。とてもかくても、この身には思
ひわづらふ事ぞなきと思ぬれば、死生とも
にわづらひなし。

まず「いけば念仏の功つもり」とは、念仏を称えて功德を積んでいくということではなく、お念仏に込められた仏の慈悲を、生きるかぎり学びつづけていくことです。

子をもって知る親の恩といいますが、おさな子が口にする「おかあさん」という言葉と、子育て世代が口にする「お母さん」は、言葉は同じでも響きはおのずと違うのでしょうか。

思いどおりにならない子育てに追いつめられつつも、わが子の愛おしさに立ちつくすとき、

ふと人はこの身にかけられた親の思いに出会います。さらに、親をこの腕に抱くようになっていくとき、そして親を見送っていくとき……

わたしたちは「お母さん」という言葉に、何度も、何度も、出遇いなおしていくのでしょうか。

お念仏もわずか一声の御名ですが、十代では分らなかつたそのぬくもりが四十になって領かれ、七十になつても、百をこえても、その味わいは深まりつづけます。そのように、生涯をかけても味わい尽くすことのできない言葉をいただいて生きていくことを、聖人は「いけば念仏の功つもり」と仰いました。

次に「しなば浄土へまいりなん」とは、死はむなしい亡びではなく、おさとの境界に生れさせていただくご縁だという意味です。考えてみれば、生も死も平等にいのちの営みであり、生が尊いならば、死もまたけっして、

むなしい出来事ではないはず。生れた者は必ず死にます。しかし私たちは、むなしくなるために生れてきたのではないはず。お念仏とは、浄土に生れるご縁として、命終わることの意味を聞きひらく道なのですね。

ふと気付きました、今日（この原稿を書いている十二月八日）はわたしの恩師、利井明弘先生のご命日でした。飾りどころなく、いつも手放してお念仏を慶んでおられた先生は、お念仏の話をされているとき、美味しいものをいただいているときとおなじ顔をされています。先生の「でや、うまいやろ」「これ、ごっついな」という嬉しそうなダミ声がいまも耳に残っています。そんな先生ですが、口ぐせのように、こう仰っていました。

「おれはな、いつ死んでもええで」
とにかくご法義に関してはどこかつ腹のすわった方でしたから、けっして強がりではありません。ですが腹のすわりすぎも考えもので、

先生は晩年心臓のバイパス手術をされたとき、入院中に隠れてタバコを吸っていて看護師さんにたいそう叱られたそうです。お医者さまをはじめ総がかりで治療に尽力くださっているなかで、さすがにそれはないですね。そんな破天荒な先生でもありましたが、ご家族に聞くと、家では逆も仰っていたそうです。

「おれはな、いつ死んでもええで」
せやけど、いつまで生きとつてもええで」
先生の口ぐせに含まれていたその切りかえしに、法然聖人の法語を思いあわせました。

「死生ともにわづらひなし」
いつ死がおとずれても、生き足りない命ではない。いつまで生きたとしても、生き過ぎる命でもない。生死をこえるとは、生と死をつらぬくいのちの意味を、仏さまの仰せのなかにたまることなのですね。ともにお念仏いただきましょう。生れ死んでいく命の意味を、お慈悲の中に領かせていただきましょう。